
詩歌・小説の中のはきもの (第16回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

157 僕の山旅の服装は、いつも古背広に古ソフトである。これは五十を過ぎて洒落っ気がなくなったからではなく、昔から一貫してそうである。ただ靴だけは、登山靴を穿くのは致しかたがない。近ごろはキャラバン・シューズと称する、ビブラムの底のついたズック靴を愛用している。

深田久弥

★『深田久弥の山さまざま』から。昔は登山者のスタイルはまちまちで、それが個性を表わしていたのに、「運動具店にさえ行けば、立ちどころに便利で手軽な品が揃うところから、誰も彼もハンで押したような服装になってしまった」、履物だって革靴や地下足袋などヴァラエティーに富んでいたのにと深田は嘆く。それがみんなと同じ「登山靴を穿くのは致しかたがない」という言葉になったのである。そんな人だったから、ネコもシャクシも「百名山」の現状を泉下で悔やんでいることだろう。

158 中学生時代というのは、一般的に悩みの多い時期であるが、シューレーシングも大きな悩みのひとつであった。そして多くの人はこの時期に自分自身のスタイルを悩んで確立する。みんな悩んで大きくなるのだ。ところが、一度形ができてしまうと、あとはそのままというケースが多い。みんな二度と悩みたくないのか、確立したスタイルは変化するコトなく続いていく。しかしそろそろもう

一度、悩んでみませんか。果たして自分の確立したヒモの通し方は本当に粋だったのかと。

綱島理友

★『体育の着こなし』から。昔の靴紐はよく切れたので、登山の時など必ずスペアを用意した。私はこの30年間切れたこともないのに、学生の時の習慣で今も予備の靴紐(シューレース)を持ち、同じ結び方で山を歩いている。紐の結び方は200種類もあるというのに。いつ、どこでわが身に刷り込まれたのか分からない価値観、人生観というのも同じことだろうと思知らされた。たかが靴紐の結び方などと侮ることはできない。

159 「下駄は」

浩司は下から浩一郎を見上げた。

「やっば、両方で一足だから」

浩一郎は大きな声で笑いながら、随分重たい冗談だなと思った。俺はあんたの弟なんだ。俺とあんたは兄弟なんだ。そう言う代りに、二人は一足の下駄だと言っている。

向田邦子

★『隣の女』の「下駄」から。堅物と思っていた父浩太郎に女がいて、隠し子に自分と同じ浩の字を与えていた。エラの張った四角い顔であるところが似ていて、笑い声も心なしか似ている。あだ名を「下駄」と名乗ったら、浩一郎も今は「牌(パイ)」

と呼ばれているが、中学生のときは「下駄」だったと分かって、二人は亡くなった父の輪郭を思い浮かべる。下駄全盛時代はたくさんあったあだ名も今はほとんどなくなってしまった。ダークダックスにも“ゲタさん”がいましたっけ。

160 いつも散歩のときに履くやわらかい黄色の皮の靴をはいた。…右の方はうまくはまったのに、左の方がはまらない。私が子供のけんけん遊びのような恰好で左足のうまく入っていない方をたたきに蹴りつけているところへ妻が送りに出て来た。

と、不意に真剣な顔で、そのまま自分の肩につかまるようにといった。

庄野潤三

★『世をへだてて』から。脳内出血で左半身にマヒがきていたのである。作者は幸いに後遺症もなく治癒し、その後も身近の小さな幸福を綴り続けている。脳血栓で左半身に麻痺を遺した歌人五味保義は「今朝もまた靴をはくことに苦しみて汗かきながら息づきにけり」とうたいながらも「他人の手をかりず靴はきよるこびをあはれ他人の知るべくもなし」と詠んでいる。

161 靴職人になることで損得や善悪を忘れることができたら、それで少なくとも発狂することはないだろうと考えています。私が作った靴を誰かが買って履いてくれる。それだけで何か救われたような気になります。靴を一足作っては何かに向って祈るのが、私が自分のために編み出した宗教なのです。

島田雅彦

★『夢使い』から。保険金目当てに妻を殺して獄中にある男の手紙である。刑務所で靴作りを覚えた人が参考に工場を見たいとやって来て、工程が余りに細分化されているのに驚いて、これでは折角手につけた技

術が活用できないと嘆いたことを思い出す。流れ作業での靴作りは「宗教」にならない。靴に限らず流れ作業は人を「救う」こともできない共通の欠陥を持っている。

162 この足（靴）に寄せる想いとは幼児期のハイハイ歩きの際、抱きつくところに母の存在がある。母の姿を視線でとらえて這いずり進む。その視線の対象部位は足元（靴をはく部位）。これから見上げる母への愛しい姿にほのかなエロファンタジーが飛翔する。

いその・えいたろう

★『フェチ楽園考』から。人体におけるフェチシズムの三大対象は脚（足を含む）、尻、乳房であるという。脚・足の延長線上に靴が対象になっていることも良く知られている。なぜだろうと考えてきたが、どうしても分からなかった。また、それを解明してみせた文献もなく、このいその説を見て初めて得心がいった。人間は何とも他愛なく、可愛い存在ではないか。

163 定年後再就職の朝の来て

地下足袋を履き脚絆を付けぬ

高塚孝次

★作者の確かな生き方は被ったり着たりでなく足元に目が行っていることで知れる。履物はその人の趣味、趣向だけでなく職業から気構えまで表すことがある。私たちは自分を客観視するために、時々足元を見直してみる必要がある。目から一番遠いところにある靴を一日何回見ているだろうか。あなたが靴を作っている人なら、本当に今の自分の生き方が靴に具現化しているだろうか。たんなる惰性で靴を作ってはいないだろうか。「決意」のともなった作り方をしているだろうか。

164 最近は、ウォーキングシューズが歩きやすいと言っているけど、靴というの

は、自分の足に慣れた靴がいちばん歩きやすいんですよ。ということは、歩き込まないとダメなんです。…ところが、いまの靴は、イージーウォーキングであり、イージーフィッティングだから、何でも合ってしまう。スニーカーみたいなのが出回っていますが、あれは長持ちしないし、穴が空いたら捨てなきゃならないでしょう。…本当に良い靴は修理できるんです。修理しながら一生使い続けるというのは靴に限った話ではなく「一生モン」の基準になりますね。

出石尚三

★『一生モン』から。幸田文の随筆に「一生もの」というのがあって、自分が一生ものを何も持っていないことに驚き、一生懸命考えた末に爪切鋏、自分の身体、自然鑑賞好きの心が一生ものだと気づく。

私たちは西欧から輸入した思想、技術などの文化文明を、産みの苦しみをしていないからめまぐるしいほど取り入れては、安易に捨ててきた。靴も例外ではなく弊履の如く捨てる。それが日本の伝統であるのかも知れない。逆説的に考えると、靴の場合は、日本の製靴業者は修理に値する靴を造り、それを顧客に売り込む努力を怠ってきたとも言えるのではないか。

165 下駄箱には息子の合わなくなった靴が何足かあるそっと出して並べてみた妻は玄関に季節の花を生けるが並べられた息子の靴はその花よりも華やぎ明るい

川崎大開

★『第36回 日展』の書の部の出品作。こうしてパソコンの「活字」によって書家の文章を打ち出しては申し訳けない。書家は、筆や硯、墨、紙、印の選択に始まって、書体を決め、表記、墨の濃淡、文字の大小、筆勢など、文筆家とは全く異なった観点から一字一字精魂込めて書いているのである。

アンパンマンなどのアニメのついたズックやバッシュも大事にとってあったのかも知れない。夢中で子育てした頃の充実した生活の思い出の残る靴を慈しんでいる妻、その妻を含めた玄関の光景を華やかと思う夫。

掛軸にしなくては済まない心境になった書家を想って、私はこの作品の前からしばらく動けなかった。

166 注意しなければならないのは、纏足の習俗は中国全土に流行したのではない、ということである。これは漢族の習俗であり、南方の少数民族の間では行われなかった。清朝の後期の皇帝やその一族はこの習俗を嫌った。

吉岡郁夫

★『身体の文化人類学』から。^{てんそく}纏足は奇習であるが、著者のいう「身体変工」という観点から見ると、野蛮視するほどの習俗とは思えない。この本にはコルセットによる体幹の変形、乳房の切断・変形、入墨、割礼、去勢、頭蓋変形、頭蓋穿孔、抜歯などが紹介されている。美容整形による鼻、二重瞼、豊胸、豊頬…そして思いは現代も広汎に連綿と続く靴による足の変形やピアスによる耳・鼻・唇の穿孔に至り、考え込んでしまう。